



こんにちは、まちかど図書館ぼたんです！今年も大変お世話になりました。おかげさまで、充実した一年を過ごすことができました。寒さ厳しい折ではございますが、どうぞご自愛のうえ、良いお年をお迎えください。来年も引き続き、よろしくお願い申し上げます。今月のニュースレターでは、11月の座談会の様子を中心に、図書館の活動をお届けします。

Topic 01 第12回イベント、開催しました！

2025年11月22日に、第12回目となるイベントを行いました。今回のスピーカーは、本ゼミナール教授の築山秀夫先生で、「ル＝グウィン」の短編「オメラスから歩み去る人々」（1974年）をみんなで読む」というテーマで読書会を行いました。今回は、本棚オーナーの攪上さん、樋口さん、坂田さん、杉山さんと、利用者の金子さん、東さん、県立大学図書館の大脇さん、一般参加の石島さん、築山ゼミ生の千野、古幡が参加しました。

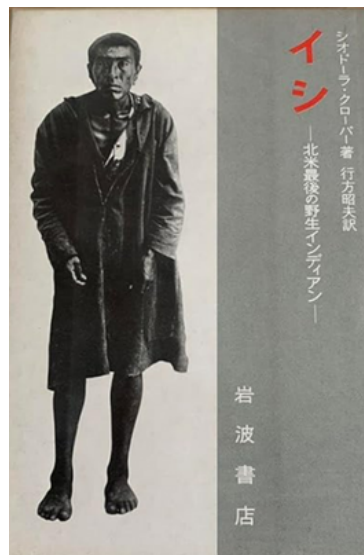
【今回紹介された本】

今回の読書会で題材となった「オメラスから歩み去る人々」は、短篇集「風の十二方位」で取り上げられているものになります。著者のアーシュラ・クローバー・ル＝グウィンは、アメリカ、カリフォルニア生まれのSF作家です。ジブリの「ゲド戦記」の原題『アースシー』を書いた人でもあります。

ル＝グウィンは、1961年に作家デビューしました。「風の十二方位」は、1961年から1974年までの17の短篇を発表順にまとめたものです。各作品の冒頭には、いかに作者がそうした題材を発展させていったのかの覚書が付いています。短編とはいえ、ほとんどが一般的な短編（それ自体完結した一個の閉じた小宇宙である）ではないのが、この短編集の特徴でもあります。

今回題材となった「オメラスから歩み去る人々」は、1973年に書かれた作品です。ヒューゴー賞短編部門を受賞した作品でもあり、アメリカの哲学者でハーバード大学教授であるマイケル・サンデルの『これからの正義の話をしよう』（2009）でも取り上げられました。

ル＝グウィンの両親についても説明されました。父は、カリフォルニア大バークレー校で教鞭をとった文化人類学者アルフレッド・ルイス・クローバー。母は、『イシ：北米最後の野生インディアン』を書いたシオドーラ・クローバー。さらに、80歳から始めたブログに掲載したエッセイをまとめた『暇なんかないわ 大切なことを考えるのに忙しくて』や、『ユリイカ』（青土社）2018年5月号のル＝グウィン特集号も紹介されました。SF研究家のダルコ・スーヴィンが「ル・グウィンの一つの到達点。思考実験としての社会システムの考察と、その中で苦悩する人間の心理の探求が見事に調和している」（1988年）と述べ、「オメラス」の続編とも読める『所有せざる人々』（1974年）についての紹介もありました。数ページの短編を巡って、関連して読むべき文献がどんどん広がり、繋がり、この世界に細かな輪郭を与えてくれます。これが目眩（めくるめ）く読書の世界です。



【オメラスは理想郷】

「オメラスから歩み去る人々」はユートピアである“オメラス”とその陰で犠牲を追わせられた子供の存在を描いた物語です。今回は、「オメラス」という喜びに満ち溢れた中世風の町を舞台に、その町の様子や秘密について読み、意見交換を行いました。

オメラスは、語り手が読者のために便宜上設定した町で、全ての人が幸せで、健康で、抑圧のない理想のまちです。この作品では、読者と対話を繰り返しながら、「あなたのお気に召すように」オメラスというユートピア（言語構築体）を作り上げていくという書き方がされています。そんなオメラスには、オメラスをユートピアであるということを成立させている犠牲・スケープゴートが存在しています。スケープゴートの存在を代償にして、ユートピアを甘受するしか仕方がないのか、「オメラスから歩み去る人々」とはどのような人なのか、読者に考えさせるお話です。短編でありながら、読み手の数だけ解釈が生まれる奥深さがあり、参加者の皆さんからも多彩な感想・意見が寄せられました。

【閉じ込められた子供はイエス・キリスト】

ユートピアとしてのオメラスを成立させている子どもは、キリストである。人類が犯した罪をキリストが自らを犠牲にすることで贖（あがな）うことと同じである。

【私たちの社会を言い当てている】

認知症の方や障害のある方が、かつて不当に扱われていた歴史を思い出したという方や、作品が現実の問題と重なるという声もありました。戦時中の子供たちの姿を重ねたという感想もあり、物語が幅広い時代や場面へとつながりましたが、まさに、今暮らしているこの社会の中にも、知らないふりをして、過ごしていることがたくさんある。

【幸せとは何かという問い】

私たちは、比較がなければ幸せを感じることが出来ない存在なのかもしれない。人が“幸せ”をどう感じるかについても話題は広がりました。

【ユートピアは本当に理想なのか】

ユートピアは完全な理想郷ではなく、良い面と同時に影の部分を持つのではないのか。例えば、ユニバーサルデザインのように皆にとっていいものを目指す場合も、必ず見落とししてしまうものがあるのではないのか。オメラスと重なる印象的な意見でした。

【オメラスから去る人々とは、どんな人なのだろう？もし自分がオメラスの住民だったら、去るだろうか？】

外からオメラスを見ている立場なら、犠牲の上に成り立つ幸福に違和感を覚え、去ろうと思うかも。でも、もし生まれ育った場所がオメラスであれば、簡単に出ていけないのでは。今の暮らしや安心を手放すことの難しさに、うなずく人が多くいました。

すぐに行動できるわけではなく、我慢が積み重なって心が限界に達した時に動き出すのではないのか。オメラスから出ることは、本当に正義なのか。出ていく人を善とし、残る人を悪とするような単純な構図では、この物語は語ることが出来ないのでは。去るという選択も、残り続けるという選択も、それぞれに迷いや葛藤を含んでおり、その場で結果は出されませんでした。参加者それぞれが自分なりに考えるという形で共有されました。精神障害のある人が置かれてきた状況や、雇用や賃金の問題などが挙げられ、このような社会問題は個人の問題ではなく、社会の仕組みや格差によって生み出されているのではないのかという意見が共有されました。今の社会を少しでも変えようとするのが、現実世界でオメラスから出ることなのかもしれないという言葉も印象に残りました。



【誰かを踏みにじりながら、自分が安逸でいることに、人はどう心を動かされるのか】

作者が問いかけているのは、「ひとりの犠牲の上に成り立つ幸福は、本当に幸福と言えるのか」という点。そのような状況では、学問も文学も芸術も成り立たない。人は心を動かされ、行動に移す人がいる。参加者の中でも、オメラスから出た。行動に移したという方々がいた。そのことが、この社会の希望である。

一方で、日本の社会では、他者を助けることから距離を取り、誰かが犠牲になっている状況があっても、自分が安逸でいることにあまり疑問を持たない人が増えているのではない。さらに、オメラスから歩み去るような人、何か今あるものへ抵抗するような動きをする人を馬鹿にして、少数者を切り捨てる態度を当然とする空気が広がっていないだろうか。

【ジョン・ロールズの正義】

最後に、マイケル・サンデルと同じハーバード大学で「正義論」を研究したジョン・ロールズの話となった。正義の二原理として、第一原理として、社会生活の基本をなす「自由」は、平等に分配すべきこと（平等な自由の原理）。第二原理として、地位や所得の不平等は、二つの条件-①最も不遇な人々の暮らし向きを最大限改善する。②機会均等の元、地位や職務を求めて全員が公正に競うあうことを充たすように編成されること（格差是正原理と公正な機会均等の原理）である。現在にも通ずる原理である。ロールズが広島の被爆後すぐの惨状を目撃したことなどについて、築山教授から話がありました。

【読書会を通して】

物語を通して、自分たちの暮らしや社会を考える時間となりました。今回の読書会では、「正しい答え」を見つけることよりも、それぞれが自分の考えや感じたことを共有する時間になりました。本を読むということが、これだけ私たちのことを揺さぶることを改めて感じるようになりました。

Topic 02

まちかどギャラリーぼたん「大黒注連」（山下勝也オーナー）

まちかどギャラリーぼたんは、当館の一階事務スペース奥上にコーナーがあります。山下勝也オーナー発案により、2025年10月からスタートいたしました。一月5,000円、半月3,000円で、展示スペースをお貸ししております。

2025年10月、11月は、山下オーナー撮影のたいへん貴重な鉄道写真を展示下さいました。そして、12月13日には、とても立派なお正月飾り「大黒注連」を展示下さいました。山下オーナーの解説文を紹介いたします。



「順風を満帆に受け、白波を蹴散らして進む宝船をイメージした形です。福德の神様である大黒天の名前を冠した、とても縁起の良い正月飾りです。」。幅が約80センチ、縦が約70センチほどもあり、大迫力の正月飾りです。また、玄関ドアの左の窓のところにも、縦型の正月飾りを設置していただきました。こちらは縦1mを超えるサイズで、これもとても立派なお飾りです。

しめ縄は、土佐日記に記述があることから、平安時代には正月飾りとして用いられていたようです。江戸時代以降は、各地の風土や週間に合わせて、しめ縄に作り手の創意を加え装飾を付けたしめ縄が作られるようになった（武蔵野美術大学美術館・図書館民俗資料室）そうです。28日には、玄関先に移動させて頂き、お正月期間中は、外からも見て頂けるようにしたいと思います。皆さん、是非、ご覧くださいませ。

Topic 03

「まちかど図書館ぼたん」1月の開館日とイベントのお知らせ

今年一年、本図書館の活動にご理解ご協力いただきありがとうございました。

新年は、6日（火）から開館です。来年も何卒宜しくお願い申し上げます。

1月24日（土）に第14回イベントを開催いたします。今回は、長野県犯罪被害者遺族自助グループ「つむぐ」の大塚清美さんをお招きし、お話しいただきます。

ぜひお越しください。

日程：1月24日（土）10:00～12:00

場所：まちかど図書館ぼたん

テーマ：「被害者の声に心を寄せて ～母子の満面の笑み、何処へ～」

報告者：大塚清美さん（長野県犯罪被害者遺族自助グループ「つむぐ」）

※今回のイベントは、前回までとは開催時間が異なり、午前中の開催となります。ご不便をおかけいたしますが、お間違えのないようご注意ください。

大塚さんのご活動については、右のQRコードの記事「母子の満面の笑み、何処へ」をお読みいただけますと幸いです。

長野県犯罪被害者遺族自助グループ

つむぐ

対象 理不尽な犯罪(交通犯罪等含む)被害により亡くなられた方のご遺族

活動 語り合いの集い
年4回程度

連絡先 長野県公安委員会指定 犯罪被害者等早期援助団体
認定NPO法人長野犯罪被害者支援センター
長野相談室 Tel.026-233-7830 (10:00～16:00 土日祝日を除く)
中信相談室 Tel.0263-73-0783 (10:00～16:00 月、水曜日のみ)

自助グループ「つむぐ」の設立趣旨
大切な家族を失ったという同じ心境にある犯罪被害者遺族同士が、安心できる場所で、自分の気持ちと向き合いながら語り合うことで、お互いに支え合い、人として生きていく力を取り戻していくことを目的として設立しました。

「つむぐ」の名称について
綿や蘭から繊維を取り出し、寄り合わせて一本の糸にしていくという意味から、「人生を紡ぐ」、「心を紡ぐ」、「想いを紡ぐ」...のように使われます。少しずつ一步一步人生を歩んでいくことを願ってグループの名称を「つむぐ」と名付けました。



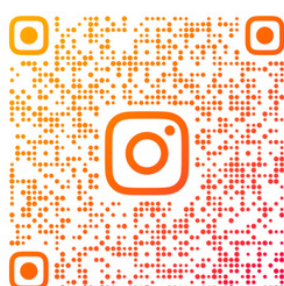
Topic 04

開館時間について

ホームページ



Instagram

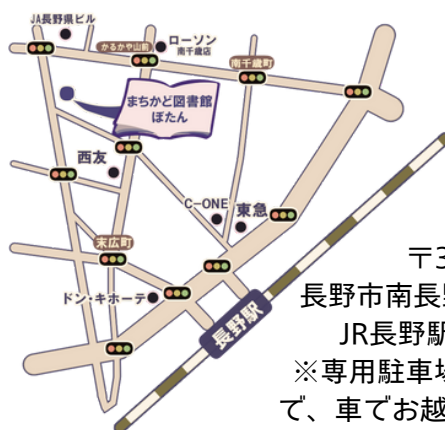


開館時間は10時から18時までですが、ゼミ生と教員が店番をしている関係で、その時間内で、可能な時間に開館しております。詳細はホームページまたはInstagramで確認をお願いいたします。

URL: <https://machikadobotan.com/>

Topic 05

アクセス



〒380-0826

長野市南長野北石堂町1185-6

JR長野駅から徒歩7分、

※専用駐車場はございませんので、車でお越しの際はお近くのコインパーキングへのご駐車をお願いいたします。



2025年12月25日発行

編集：長野県立大学 グローバルマネジメント学部 築山ゼミナール

住所：〒380-8525 長野市三輪8-49-7 B309研究室

Tel: 026-217-2241 (代表) fax: 026-235-0026

E-mail: tsukiyama.hideo@u-nagano.ac.jp

主催：長野市中心市街地活性化協議会